九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ディヴィッド・ヒュームの「自己」について

高田，熱美
九州大学医療技術短期大学部一般教育

https://doi.org/10.15017/160

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 13, pp.73-85, 1986-02-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

ディヴィッド・ヒュームの「自己」について

高 田 熱 美*

David Hume's Theory of 'Self'

Atsumi Takada

序

18世紀の英国の思想には感情や感覚を人間の行為の源泉と見る流れがある。Hutcheson や Hume, Smith たちはその流れの中心にあった。彼らにとって感情や感覚は人間の行為の源泉であって，それは人間の現象にあまねく浸みわたっているのであった。とりわけ，Hume と Smith は相互に影響し合いながら感情こそが人間性の本質であり，感情における共感 (sympathy) が人と人とを結びつける絆であり，しかも道徳感情の基礎をつくると見てきた。共感は，人と人とが感情を同じくすることであるのみならず、相互に浸透して他者の生をともに生きることでもあったのである。

こういう共感は，Hume や Smith にとっては本源かつ自然的なものであって，いかなる人間にも可能性として存在していたのである。たとえば，こどもは母親が泣くのを見て泣き，見物人たちは曲芸師の身体が綱の上で揺れ動くのに合わせて自分たちの身体を揺れ動かしている。これは、たんなる模写論的な意味での模倣ではなく、他者の心身の状態がこどもの身体あるいは見物人の身体を通して現前したというべきであろう。いわば、こどもと母親，見物人と曲芸師とは，ひとつの癒合状態にあるのだ。

ところが、Smith によれば，こどもは大人になると想像力によって自己を他者の立場に置くことが可能になり、それが共感を促進するという。こどもにおける共感と大人における共感とは異なっているのだ。その違いは，こどもと大人における自己の内容もしくは構造の違いからくるのであろう。つまり，真の共感は自己と他者との区別がつくことが前提となるであろう。それゆえ，共感は自己の確立，自律を前提とする。共感は，自他の区別を知り，その差異に立ちながら，それを越え出ることにおいて成立するのである。

たとえば，Merleau-Ponty はこどもと大人の共感について次のように述べた。

「最初の自我は，このように自分というものについて何も知らないし，それだけ自分の限界もわかっていないわけですが、それに反して成人の自我は，自分自身の限界を知っておりながら，同時に本当の意味の共感によってそこを越え出る能力をも合わせ持った自我になっています。この共感は，少なくとも比較的な意味では当初の共感と異っているはずです。当初の共感は，＜他人の知覚＞よりはむしろ＜自分に対する無知＞にもとづいていたわけですが，成人の共感のほうは『他者』と『他者』との間に起こるものであって，自己と他人との相違が消滅することを前提にして成り立つようなものではないからです。(1)」

そうすると，真の共感の成立及びその意味の探求は，自己ないし自我の確立及びその探求を必須とするであろう。われわれは，したがって，Hume や Smith が，他者の立場を想像し，共感に至る人間の中心点としての自己をどう解しているか，それを問うことにしたい。そして，まず，ここでは Hume の自己についての問いから

* 九州大学医療技術短期大学部一般教育

始めることにしよう。

I　知覚の束としての自己

Humeの考える自己とはいかなるものか。ところがHumeは，思いもかけぬ答えをもって，われわれの出端をくじく。「自己(Self)と呼ぶものをわれわれがたえず親しく意識していると想っている哲学者たちもある。すなわち，彼らは，われわれが自己の存在及び自己の存在の持続を感じており(feel)，論証による明証以上に，自己の完全な同一性と単純性とを確信していると想っているのである。[2]」

これら，自己の存在を感じ，かつ確信している哲学者たちに対して，「しかし不幸なことに[3]」とHumeは水をさす。実は，これらの哲学者たちの主張を裏づける経験は存在しないのである。むしろ，Humeは，この主張は経験に反しているというのである。

「私の見るところでは，私が自己自身(my self)と呼ぶものの中へもっとも親密に入っていったとき，私はいつも暑さや寒さ，明るさや暗さ，愛や憎しみ，苦や快といった個々の知覚に出会うのである。[4]」私が，自己自身の中に沈潜していったとき，そこで見えてくるのは，自己の存在の確かさではない。私は私を知覚することはない。私は偶然にも様々の知覚に出会うのである。つまり，そこで，私は，暑さや寒さ，明るさや暗さ，愛や憎しみ，快や苦といった様々の知覚にふれるにすぎないのである。「私は，知覚なしにはいかなる時にも自己自身(myself)を捕えることは決してできないし，また知覚以外のいかなるものをも決して観察することはできない。[5]」とすれば，「私は知覚より他には何も知覚しない。それゆえ，自己を構成するものはこれら知覚の構成である。[6]」「したがって，これらの知覚は自己と同じであるにちがいない。[7]」ということになる。

私が知覚するものは知覚だけである。このことから自己とは知覚であり，また，かりに，自己と知覚とが別のものであるとしても，私は知覚することによってしか何も知ることができないのであるから，知覚と自己とは同じであるというほかはない。これがHumeの主張であろう。

もっとも，Humeは，私が知覚に出会い，観察をする，と述べた。知覚をして自己と呼ぶとすれば，この私なるものは何と呼ぶべきか。私は知覚（観察）する。「知覚する」という述語の対象は刻々と変化する。したがって，無数の知覚が突出し，消滅する。この，めくるめく知覚の明滅を自己と見るならば，この自己は変転きわまりないことになる。このような知覚の様態を自己と呼ぶことはできないのではないか。すると，やはり，「私は知覚より他には何も知覚しない」としても，なお，知覚している私がつねに在るのであって，この私とは何かという問いを看過することはできないように思われる。

私は知覚するというのは，たんに感じとるというだけではなく，意識している，あるいは知っている，分かっている，という広義のものであろう。いずれもこれは，私という第一人称の主語と述語によって成立している。ところが，Humeは，この主語——述語の命題を突破してしまうのである。そして，意識ないし判断以前の自己について触れてしまう。たとえば，私は音楽を知覚する。すなわち聴く。そのうち音楽に共鳴して，私は自分が音楽を聴いているという状態から脱する。音楽そのものが私の中に入りこみ，私が音楽の中に入りこむからである。音楽と私とが相互に浸透して，音楽が私において，私が音楽において生き生きと生きる。ここでは，私があるものを知覚・意識しているという命題は成立しない。ただ，音楽と自己との触れが在るのみである。したがって，「……人間とは，さまざまな知覚の束あるいは集合にほかならず，それらの知覚は相互に思いもつかぬ速さで継起し，たえざる流動の中にあるのだ，と私は敢えて確信してよいであろう。[8]」つまり，Humeは，音楽と自己との触れを知覚というのだ。だから，ここでは知覚のみがある。それゆえ，Humeが真に自己の中へ入っていったとき出会うのは知覚だけである。この知覚は，「知

覚する」という動詞のもつ意味と違って，主客の定立，意識・判断以前の「こと」である。

Humeにおいては，音楽があり，自然の空や山があり，人の手や身体がある。音，空間　力，といった知覚が矢のように飛び込んできては流れ去って行く。知覚は生き生きとして在る。だが私はかくある知覚を知覚——意識してはいない。私が対象を意識しているわけではない。ここには知覚する主体と知覚される客体との距離はない。それは純粋な知覚というべきか。ただ知覚在りというべきか。

ここには，Descartesのいうコギトはない。こういう知覚は，自己の確立していない，いわば自他の未分化，自己の未完成なこどもにあるのであろうか。否，この知覚はこどもだけにあるのでもあるまい。問題は，Humeのように自己を純粋な知覚と見ることが果してどこまで可能であるか，ということであろう。

思えば，Humeの自己——知覚同一説が認識論における模写説に由来するのではないかという見方も出てくる。Humeは，知覚は印象(impression)と観念(idea)から成るという。[9] また，印象には感覚(sensation)と屈折(reflexion)がある。そして，知覚が成立する仕組は次のようになる。すなわち，まず感覚が生起する。この感覚は，感覚力を刺激されて生起するもので，熱や，冷たさ，渇き，飢え，快と苦などである。したがって，Humeにおける感覚は生理学でいう特殊感覚や体性感覚のほかに内臓感覚をも含んでいる。やがて，この感覚印象は消えるのであるが，そのあとにも写し（コピイ）はのこっていて，これが観念である。たとえば，快と苦の感覚印象はコピイされて快と苦の観念となる。また，快と苦の観念は屈折されて欲望や希望，恐れや嫌悪の印象となる。

Humeにおいては，このように，感覚印象——観念——屈折印象がくりかえされる。それゆえ，Humeは，印象と観念との本質的区別をしてはいない。敢えていえば，それは，「心を打って思考や意識の中へ分け入るときの勢いや生気[10]」の違いであった。つまり，勢いや生気にみちたものが印象で，そうでないものが観念である。ただ，その場合も，そのことは第一次の印象と観念についていえることである。

Humeにおいては，なぜ感覚印象が生れ，それがコピイされて観念となり，さらにそれが屈折され，そのプロセスがくりかえされるのか，明らかにされてはいない。Humeは，それこそが人間の自然であるというのであろう。要するに，Humeにおいては，印象や観念という知覚が心に電光のように飛来しては去っているのだ。すると，やはり，自己とは，このような感覚が継起する場であり，実質的には感覚の継起そのものであるということになるのか。

一般に，われわれは，主語—述語という記述命題で知覚・認識の問題を取り扱う習慣をもっている。また，われわれは，印象は感覚的知覚であり，観念は記号によってとらえられた意識であると見る。したがって，印象は外から飛び込み，観念は内側の心から生起すると見る。ところがHumeはそういう内外の区別を放棄する。そうであれば印象と観念の区別も消失するわけで，印象という知覚がすべてとなる。そして，わずかに印象の強さと弱さとが印象と観念の区別となる。それゆえ，Humeのいう印象——知覚は模写説ではない。認識論上の模写説が成立するためには，外と内，写されるものと写すものとが相対していなければならない。Humeはただ，心に生成し消去する印象をそのまま語っているのだ。それがHumeの出発点であったのだ。この出発点は心の外と内とに分析される以前の事実なのである。

Humeの試みの影響は小さくはない。これはDescartesのコギト，自己の内的直観の絶対性を無視させる。人間はまさに「知覚の束」であるのだ。

それでは，自己，人格，あるいは人間の心は，飛来しては去る無数の知覚のたんなる集合にすぎないのか。音楽は，ピアノ，バイオリン，太鼓，フルートなどが出す音の集合にすぎないのか。否，様々の楽器から流れ出る音の知覚がバラバラに継起しているわけではあるまい。心に

継起する知覚は，無数のバラバラな音や色彩や形のカオスではない。これらの知覚は，音のハーモニーとして，風景として，構造として，つまりコスモスとしての知覚である。そして，心を打って飛び込んでくる生気と勢いのある知覚は，心の座相ないし気配に依存するであろう。

もっとも，Humeはそうしたことをここでは語ろうとはしない。Humeは，まず，人間の心には知覚があるということ，したがって，心の内実は知覚であり，自己というものを考えるとすれば，それは知覚である外はない，と語りたかったのである。

一見すると，Humeの主張は自己を破壊し尽くしたかに見える。だが，Humeは，Descartesのコギト，そして外界・自然の絶対性に痛撃を加え，その明証性を疑義あるものにしたが，自己を否定しきったわけではない。Humeは，自己とは「様々な知覚の束ないし集合(a bundle or collection of different perception)」であると述べたのだが，そう語る主体は何であるかについては，問うてはいない。Humeは，それらをカッコに入れて，自己とは，知覚の純粋かつ生きた活動であることを示して見せたのであった。知覚があること，これこそが何にもまして自明なことであって，これがあらゆる人間的な行為の基礎であると言いたいのである。したがって，この観点に立つかぎり，まず，心に知覚があるのみであって，自己の観念などはない。自己の観念を起こさせる印象もない。あるひとつの観念を生じさせるのは，いつもひとつの印象であるが，これは自己ではない。もし，自己が印象から生じる観念に関わると仮定するなら，「自己は，何かひとつの印象ではなく，いくつかの印象と観念とがそれと関係をもつと考えられているようなもののことである。[11]」Humeは，ここで，自己の存在をかすかに暗示している。自己は，印象及び観念と関係をもつ何かであろう。しかし，自己は印象及び観念から生起するのではない。「もし，なんらかの印象が自己という観念を生起させるとすると，その印象はわれわれの生涯にわたって不変で同じでありつづけなければならない。[12]」はずである。けだし，自己は，不変で，持続するものと考えられているからである。世間には，自己は確かな実体であるとの確信がある。だが、印象においては，恒常かつ不変の印象などありはしないのである。快や苦，音や色，悲しみや喜びなど，いろいろな感覚や情念の知覚が次々と現われては去って行く。それゆえ，この世界には自己の観念は存在しない。在るのは，その都度の生き生きとした純粋な知覚の継起だけである。

II　想像力の展開

Humeは，自己とは純粋な知覚の継起にすぎないという。Humeにとっては，「われ在り」ではなく「知覚在り」ということになろう。しかしながら，それではなぜ，自己という名辞が存在するのか。自己という名辞は，主語－述語の文法形式を成立させるために要求された，文法上の要請であるのか。そうであるならば，なぜ文法形式はそれを要請するのか。自己，すなわち私という名辞はやはり消滅することはない。私は字を書く，散歩する，風景を見る，風の音を聞く，など無数の述語が私の後に現われては消える。これら無数の知覚が心に流れ込み，去って行くとしても，それは私において生起していることであり，私はそういうことを知っている。もしくは知ることができる。そういうことを知りかつ知りうることは，知覚によって左右されない。したがって，私は知覚そのものではない。私とは知覚が生起するところのものであるとしても，また，私が外的対象に出会い，知覚において自己自身を意識していない時があるとしても，私と知覚とは同一ではない。私とは，知覚があること，あるいは知覚し，知覚していたことを知っている。それゆえ，この私は知覚の外に立っている。外にあるがゆえに，継続的に生起する知覚にもかかわらず，私は私であるということになるのではないか。けだし，知覚の中に私があるのであれば，私は知覚の中で刻々と変化し，無数の私がバラバラにあることになるであろう。私は私以外の何かに代置でき

ない何ものかなのだ。

Humeも，やはり，自己についてのもうひとつの見方をとってみる。すなわち，Humeは知覚の外に在る自己について言及する。彼はカッコをはずしてみるのだ。すると，やはり，私は私であること，時と場所の如何にかかわらず，私は私であることはたしかなことに見えてくる。音楽にふれていること，夢を見ていること，などが打ち破られて，ハッと目ざめ，私がそうであったことに気づいたとき，気づかずに音楽にふれ，夢を見ていた私とそれに気づいた私とが同一であることを知っている。両者には差異はあるがしかし同一なのである。自己の同一性及び単純性はたしかなことのように思われる。両者の差異は関係の差異あるいは両者の距離の差異であるともいえるが，ともかくそれを可能にし，かつ分裂せず統合する力が働いているのであろう。そのため，二つの自己が現われても，なお自己は自己であるとの同一性をわれわれは生きるのであろう。

Humeは問う。「さて，それでは，何がわれわれに，これら継起する知覚に同一性を帰し，しかも，全生涯にわたって不変かつ連続した存在を自ら有すると想わしめるかくも大きな性向(propension)を与えるのか。[13]」同一性の観念は人間の性向であるという。Humeにおいては，知覚の同一性を成立させる原因は知覚そのものにあろうはずはなく，原因は，したがって知覚の外にあるものでなければならない。これが性向というのであろう。

それでは性向とは何か。Humeによると，事物(object)の同一性(identity)の観念と継起(succession)の観念とは完全に異なっている。同一性の観念とは，時間の経過を通じて不変であるということであり，継起の観念は時間の経過を通じて事物が刻々と変化すること，しかもその事物には前後に何の連続性も見られないことであろう。たとえば，ひとつのリンゴを見る。リンゴが見えるといった方がよい。このリンゴは，時間の経過の中が次々と新しいリンゴとして現われる。いま，ここに，在るリンゴは，さっき，ここに在ったリンゴと同一ではないのだ。無数のリンゴの知覚が継起する。このリンゴの知覚を連続させ，同一のものとするのは，知覚の外にある性向なのである。Humeはその性向を想像力(imagination)と呼ぶ。想像力は，継起の観念を同一性の観念に帰してしまうのである。

Humeは，そのことを動植物の例を引いて明らかにしようとする。「けだし，動植物に帰せしめる同一性と自己あるいは人格の同一性との間には大きな類似性があるからである。[14]」植物，朝顔の種子を考えてみよう。この種子は芽を出し，成長し，花を咲かせる。これは，日々変化して，われわれに継起の観念を与えるにすぎない。しかし，同時に，以前，種子であったものがいまの朝顔であるとの同一性の観念をわれわれはもつ。あるいは，台風で小枝をもぎとられた樹木も，他ならぬあの樹木そのものとしての同一性の観念を与える。それはなぜか。Humeによると，事物の同一性は，「類似，近接あるいは因果性によって結合された諸部分の継起から成るようなものにつきる。[15]」つまり，まず，樹木の変化がわずかであれば，類似，近接，因果性によって，ひとつの錯誤であるが，知覚の連続性が起こる。「この連続的知覚(continual perception)から，心は対象(object)に持続的な存在と同一性とを帰するのである。[16]」

Humeは，類似(resemblance)と近接(contiguity)と因果性(causation)が知覚の連続性を産み，それが事物の持続及び同一性を認識させるというのである。では，類似，近接，因果性なるものはどのようにして生れるのか。これは知覚の外にあるものだ。この，知覚の外にあって働く何かが，連続的知覚を生み，事物の恒常的存在を可能にするのである。類似，近接，因果性を生起させる働きは何か。Humeの思惟をもう少し追ってみよう。

Humeによると，事物の変化が大きいときには，事物の各部分の有機的な結びつきないし部分相互の関係が表わす機能が想像される。結びつきないし部分相互の関係とはその事物の機能

あるいは共通目的(common end)において成立する。これは相当に拡大して解することができる。たとえば，煉瓦作りの教会が倒壊したので砂石造りの新しい教会を再建したとする。この教会は，教会建築という種類において同じであるとしても，本質的には同一ではない。しかしながら，教区の住民たちは，いずれも，それを一つの教会と見て，前の教会が再建されたと称することができる。教会は住民との関係の連続性ないし目的・機能性において，いつの間にか，同一の教会と見られるのである。[17]

さらにHumeを追求してみよう。「河の本性は諸部分の運行と変化にある。[18]」この河が洪水によって大きく変ったとしても，やはり河は同じものと見なされる。河の運行と変化とは河の本性と見られるわけである。すなわち，運行と変化は想像力によって習慣的なものと見なされ，そのことが河川の大きな変容をも希薄にしてしまうのである。習慣的見方は，「思惟の連続性(the continuity of the thought) を中断することも少なく，同一性を破壊する影響も少ない。[19]」

Humeにおいて，事物の同一性を成立させる原因は知覚そのものではない。それは，知覚する側の，事物への想像的習慣関係というべきことであろう。Humeは，想像を「虚想(fiction)」ないし「謬想(error)[20]」とさえ呼ぶ。そういうのは，想像力が心の働き(act of mind)による創造力であって，この力が知覚の連続化と統合化を促進するからであろう。類似，近接，因果性といった推論的働きもこの想像力の一端であると見てよいであろう。もちろん，想像力はたんなる推論的働きを超えている。想像力は事物の知覚と同時に端的にその同一性を確定させる。われわれは，事物の同一性を熟考したあげく確定したりはしない。われわれは，即座に，この物はあの時の物であることを微かな印象によってさえ確定する。このことは，一定の事物のみならず変化している事物についてもいえるのである。

この点で，Humeがいう想像力の意味は広い。Humeは，想像力を人間の自然つまり性向と見ていた。しかしさらにその意味を問われるならば，Humeは「神秘的で説明することのできない何ものか(something mysterious and inexplicable)[21]」と答えるであろう。

Humeによると事物の同一性と同様に人格の同一性も想像力によって成立する。「人間の心へわれわれが帰する同一性は，われわれが植物や動物の身体に帰する同一性と同じ種類のものである。[22]」幼木が大樹となり，乳児が成人となることにおける同一性は，想像力によって成立する。

もっとも，Humeがいう同一性なる概念も決して明快ではない。その定義は十分に為されてはいない。Humeがくりかえし語ったように，事物の知覚は，ボールのように次々と心の中に飛び込んできては消滅するのであった。樹木を例にとれば，その色，形というより個々の部分，一枚の葉，花，小枝，など無数の部分，そしてさらにその部分の知覚が生起すると見てよい。そのために，おそらく眼球はそれこそ目まぐるしく回転して個々を知覚するであろう。ところが，われわれは，実際には，樹木を見ているのであって，樹木の個々の部分を見てはいない。人を見るときも同様であって，人の顔の目とか口とか鼻とかの部分を見てはいない。それらの部分が見えているとしても，本来見ているのは顔の全体なのである。われわれは顔全体の印象を感受しているのである。それゆえ，個々の知覚の統合・印象によって物や人格の同一性が確認されると見るべきであろう。したがって，「この同一性という関係(this relation of identity)」は，個別の知覚が結びついた，「知覚の全系列(the whole train of perceptions)[23]」ということになる。

このことは，知覚と知覚とを結びつける線ないし知覚の持続があるということではない。「知性(understanding)は，対象の間のいかなる真の結びつき(connexion)をも観察しない。[24]」つまり，本来，知覚がかんてんのように固まって結びついているのではなく，一個の知覚

と他の知覚とを結びつける別の働きが存在する。それは想像力であった。「…… 同一性とは，実際には，こうした異なる知覚に属して，それらを一つに結びつけるものなどではなく，われわれが知覚を省みるとき，知覚の観念が想像において結びつくがゆえに知覚に帰するある性質にすぎない。[25]」われわれは，「知覚についての観念を想像力において連合する。[26]」のである。

観念を連合するということは，個々の知覚の観念をあたかも数珠玉をつなぐように結びつけることではない。個々の観念を想像力によって端的に統合し，そのことにおいて観念が結びつくということである。もちろん，この想像力は習慣に依存するであろう。習慣とは広義の文化であるといえる。したがって，想像力は文化に依存することになろう。それゆえ，観念の統合も文化の色彩を帯びるはずである。Hume の想像力の背景にはこのような，文化習慣がひかえている。また，それと同時に，Hume は，観念を結合する性質を対象・事物の側にも見てきた。その性質は，たしかに想像力によって生起するのであるが，それと等しく事物の側にもあって，想像力が働く契機にもなったのである。それは，類似，近接，因果性であって，「これら三つの関係のいずれかに同一性は依存する[27]」のである。

但し，これら三つの関係が生きるにはさらなる働きが前提となる。それは記憶ということである。ここで，他者の人格の同一性ではなく，私という人格の同一性をも省察するべきではないか，というさらなる問題が生れる。

Hume は，自然の想像力による知覚・観念の連合に人格の同一性は依存するといった。依存する (depend) ということばは微妙である。このことは，私が私であるという意味での人格の自己同一性を十分に説明してはいない。そう考えもしたのか， Hume は説く，「したがって，残る唯一の疑問は，いかなる関係によって，われわれの思考 (thought) の，この断えまない進行が，心あるいは思考する人格 (thinking person) の継続する存在をわれわれが考えるときに産み出されるかということである。[28]」Hume は，人間を心あるいは思考する人格または「思考する原理[29]」というのである。それゆえ，人格の同一性は思考の連続性にも依存するのであろう。かって私はあのように考え，語ったが，いまもなお，私はあのように考え，語るというのは，思考の連続性を示す一例といってよいであろう。

それでは，思考とは何か。ここでは， Hume は思考の意味や定義を問わない。それは意識することを含む広い意味のものであろう。おそらく，思考は想像力と深い関わりをもつにちがいない。これを見るために，もう一度知覚の連合について触れておこう。すでに検討したように，事物においては，ボールのように心の中に飛びこんでくる知覚を想像力によって連合し，ひとつの像として構成することができた。たとえば，視覚についていえば，われわれは，この点からある事物を見るのであるが，そのときも各瞬間にはっきりと見える範囲は非常に狭いはずである。われわれは事物の，限られたほんの一部を知覚するにすぎないのである。それゆえ，事物の全体が見えるためには，眼球は目まぐるしい移動によって，事物の各部分の知覚を次々と瞬時に得なければならない。こういう働きは事物の全体を知覚することを求める内的力によるであろう。個々の知覚は集積され，それが事物の全体像の成立へ参加するのである。Hume はこの内的力をも人間の性向である想像力に含めるであろう。したがって，想像力は事物の全体像を構成しようとする力，個々の知覚を統合する力，前もって知覚の散乱を防ぎ，秩序において知覚の生起を可能にしようとする力，といってよいであろう。そして，思考は，このような想像力の有力な機能というべきであろう。

思考は時の経過において成立する。この点で思考は記憶と結びつく。記憶に，事物及び他の人格の同一性のみならず思考する私という人格の同一性は依存するのである。つまり，心に生起した知覚を統合したものを，持続させることにおいて，事物や人格の同一性は成立するのであるが，記憶はその持続を可能にするのである。

「記憶は，われわれが過去の知覚の心像を呼び起こす機能にほかならない。[30]」記憶は，過去の知覚像と現在の知覚像との類似，近接，因果関係をつくり出し，事物，他者及び自己の同一性を告げる。つまり，記憶は，時の経過にもかかわらず，過去の事物，彼や私が，現在のそれであることを示すことによって，「人格の同一性の産出にも貢献する。[31]」のである。さらにHumeはいう，「記憶だけが知覚の継起の持続と広がりをわれわれに知らせるのであるから，その理由で，主として記憶を人格の同一性の源泉と見ることができよう。[32]」われわれは，過去のすべてを記憶しているわけではないが，一旦，ある事物ないし事柄についての関係が想像によって生れ，それが記憶されると，それは連続し，統合されたものとして同一性を獲得するのである。

私 — 自己の同一性もこのような働きによって成立する。私は想像力によって私についての知覚を像として想像し，それを記憶することにおいて私の同一性を定立する。

Humeは，このように，同一性を成立させる働きについて検討してきた。この働きは広義の想像力であって，思考も記憶もそれに含まれるべきものであった。なぜなら，思考も記憶も，個々の事物の知覚を越えて飛空する想像の働きであったからである。それゆえ，同一性は想像力に依存するのであった。しかしながら，Humeは，想像力が心や人格を産むとはいわなかった。むしろ，人格が想像を働かせて自己の同一性を産むのではないか。したがって，記憶が人格の同一性を産む(produce) のではないともいえる。[33]すでにHumeは，「思考する人格」あるいは「思考する原理」ということばを用いた。連続する思考はたしかに想像力によるものであろうが，そういう思考や想像を可能にする原理はまさに人格なのではあるまいか。

かくして，問うべきことは逆であるように思われる。すなわち，自然の性向である想像力が人格の同一性の成立に関わるにしても，本質的には，同一性を産むのではなく，人格ないし人格の同一性を保持せんとする何かが，想像力を駆使して，自己の同一性をつくりだすのではないか。もし，そうであるとすれば，そのものは何であるか。この問いは，人格ないし自己とは何であるか，という直接かつ原理的な問いへわれわれをいざなうのである。

III　自己認識への懐疑

Humeは，その著『人間性論』の最後に付録をおき，自己の同一性の探求について告白する。「…… 人格の同一性の節をもっと厳密に見てみると，私は迷路に引き込まれたように感じて，どのようにして以前の考えを改めたらよいのか。どのようにしてこの考えを矛盾のないものにしたらよいのか，私にはわからないと告白するほかはない。[34]」Humeは，知覚の連合ないし統合されたもの，したがって，基本的には知覚そのものを自己であるとしたのであるが，他方では，知覚を想像力によって統括する原理があるということ，こうしたことを知りかつ語る自己が現にあるということを素直に表明する。両者，すなわち知覚があるということと知覚するものがあるということとは同一にして，しかも差異・距離のあるものであることの不可思議な関係を，Humeは認める。そして，「自己すなわち思考する存在の厳密かつ真正な同一性と単純性[35]」を肯定も否定もすることができるという。

Humeによると，まず自己の存在を否定的にとらえることができる。自己あるいは実体(substance)について考えるとき，われわれは自己あるいは実体についての印象と印象に起因する観念をもたなければならない。しかし，われわれは自己及び実体についての印象も観念ももってはいない。したがって，自己という言葉(term)はいかなる意味での観念をももたない。

Humeにとっては，すべての印象及び観念を意味するところの知覚は，分離することができかつ分離してある別個のものであった。たとえば，私がここにある椅子と向こうにある煙突とき見るとき，私の心に現われるものは個々の知覚だけである。対象である椅子や煙突が別個で

あるように，それらについての知覚も別個の知覚である。同じ方法で，自己に目を向けると，自己の知覚などはどこにも存在しない。もし，自己を知覚することがありうるとすれば，これは，自己を知覚の合成(composition)[36]とすることにおいてであろう。けだし，知覚は分離し，独立した別個のものであるとすれば，自己の知覚についていえば，それを知覚の合成とするほかはないであろう。しかし，真にそうした知覚が可能であるとすれば，知覚の意味を根本から変えねばならぬという矛盾をさけることができない。何にしても，われわれは知覚の合成を知覚することはできないのだ。

では，「自己は実体と同じであるか。[37]」われわれは，すでに，自己についても実体についても印象も観念ももってはいないとした。この点で両者は共通している。いうまでもなく，実体とは知覚を支える不変なもの，あるいは現象の本質といったものであろう。もし，そうしたものがあれば，自己についても，個々の知覚の基底にあって，それを支える不変の本質を見ることができるであろう。だが，Humeにとっては，個々の知覚を抜きにしては，「自己と実体のいずれをも全くわからないのである。[38]」

Humeにとって明白と思われるのは二つの原理であった。「すなわち，それは，われわれの別個な知覚はすべて別個な知覚であるということ及び心はすべて別個な存在の間にいかなる真の結合をも決して知覚しないということである。[39]」別個な知覚は結合されることによってのみ一つの全体を形成するのであるが，「別個な存在の間の結合は人間の知性 (human understanding) によっては決して発見できはしないのである。[40]」

Humeによると，大陸の哲学者たちは人格の同一性が思惟あるいは意識から起こると考えたがっている。だが，「意識(consciousness)とは反省された思惟ないし知覚(a reflected thought or perception)にほかならない。[41]」のであって，「これら意識ないし思惟の中でわれわれの継起する知覚を結びつける原理[42]」を明らかにすることはできないのである。つまり，意識や思惟全体が知覚であるから，知覚が知覚を結びつけるというのは矛盾である。それゆえ，「私は考える，ゆえに私はある」という命題は成り立たないのであって，「考えないし思惟がある」という命題があるのみであろう。

Humeにおいては，こうして，考え，意識，思惟といったものはすべて知覚に還元された。知覚は，色，形，音，匂い，味，などまとまりのない個別的なものであって，これらを統合する知覚などはないのであった。

たとえば，ここに赤く丸いリンゴがあるとすると，われわれの心には丸い，赤い，など個別の感覚知覚が生起する。それで，このリンゴは赤くて丸いというまとまった理解は，知覚によるのではなく，それ以外の人間性の働き，すなわち想像力によるものであろう。想像力とは何か。おそらく，想像力は，人間の性向のひとつである情念と関わるのではないか。かくして，Humeはこう結論する。「われわれは，ある対象から他の対象へと移る思惟の結合すなわち規定 (a connexion or determination of the thought) をただ感じる(feel)だけである。[43]」

Humeが知性のレベルで語りうることはこれだけである。Humeは，自己の同一性の探求に知性の限界を見た。ということは，自己の同一性つまり私であることは，知られうるものではなく，感じとられるものということであろう。したがって，自己の同一性は知性 (understanding) ではなく情念(passion)ないし感情に由来すると見るべきではないか。

Ⅳ 情念における自己

Humeは自己についてこう考えていた。「人間の心についての真の観念は，因果の関係によって共につながれ，相互に産出し，破壊し，影響しかつ互いに修正し合う様々の知覚ないし存在の体系(a system of different perception or different existences)と考えられる。[44]」それは「知覚の束や集合」とも呼ばれていた。そして，Humeは，これら「体系」や「束や集

合」を「国家ないし共和国[45]」にたとえている。つまり，共和国において様々の成員が生れ，死に，結びつき，反撥し合って，絶え間ない変化をくりかえしているが，それでも，共和国はそれとして存在している。それは，教育や伝達によって，次の世代へ基本となるものを伝えているからであろう。「同様に，同じ人物が自己の同一性を失わずに，自己の印象や観念のみならず，性格や傾向をも変化させうるのである。[46]」共和国において，法律や組織，その成員に変化があっても，なお共和国としての歴史的連続性ないし同一性が見られるように，人格の場合にも連続性ないし同一性が見られるのだ。

Hume は，こうした場合の人格の同一性を「情念に関する同一性 (identity with regard to the passion) [47]」と呼ぶ。したがって，人格の同一性には，「思考ないし想像についての人格の同一性と情念つまり自己自身についていだく関心についての人格の同一性[48]」があることになる。そして，「…… 情念についての同一性は離れている知覚を影響させ合い，過去や未来の快苦についての関心を現在にいだかせることで，想像に関する同一性を確かにするように働くのである。[49]」情念は，自己自身についての関心であるがゆえに，様々の知覚の接合，変容においてもなお，人間の同一性を保つように働くのである。したがって，自己の同一性の生成において，想像力と情念とは互いに協同していることになる。

それでは情念とは何であり，いかなる関係を知覚との間にもつのか。

Hume によると，心にあらわれるすべての知覚は印象と観念とから成っていた。さらに印象は，原初ないし感覚 (sensation) の印象と二次ないし反省の印象とから成る。そして，原初の感覚印象あるいはそれを再現した観念から二次の反省の印象が生れる。ここで Hume はいう，「すべての感覚力 (senses) の印象および身体的快苦が第一の種類であり，情念及びそれに類似したほかの情緒 (emotion) が第二の種類のものである。[50]」つまり，情念や情緒は二次の反省の印象に属している。

さらに Hume は情念を二つに分ける。直接的情念と間接的情念である。「直接的情念 (direct passion) とは，善悪，快苦から直ちに生じるようなものである。[51]」これには，欲望，嫌悪，悲哀，喜び，希望，恐怖，絶望，安心，などが含まれる。他方，「間接的情念」は善悪，快苦の原理から生れるのではあるが，ほかの性質と結びついているものである。それには，誇り，卑下，野心，高慢，愛，憎しみ，うらやみ，憐れみ，悪意，寛大及びそれらに依存する情念を含める。

Hume は直接的情念と間接的情念との区別をさらに解明しようとはしない。Hume においては，感覚の印象 — 観念 — 屈折・反省の印象— 感覚の印象，のくりかえし，いわば循環があって，情念もその中に組み込まれているのであるから，情念の分析を本格的には取り組まなかったのであろう。ただ，二つの情念はいずれも，感覚の印象を一応の出発点として生れる快苦を基底にしている。しかも，これらの情念は自己に関わるものであって，そのなかでも誇り (pride) と卑下 (humility) とは自己そのものを根拠としている。

われわれは何を誇り，卑下するのか。「自己が考慮に入れないときには，誇りや卑下のいずれも起こる余地はない。[52]」これらの情念が起こるときには，「いつも視点 (view) は自己に固定する。[53]」のである。したがって，誇りと卑下の対象は「自己すなわちわれわれがよく記憶し，意識している，関連し合う観念や印象の継起である。[54]」

われわれは自己を誇り，卑下する。「しかし，自己 (self) とよばれる，結び合った知覚の継起が，つねにこれら二つの情念の対象 (object) であるとはいえ，自己が情念の原因 (cause) であるということ，つまり自己だけでかかる情念を呼び起こすことは不可能である。[55]」われわれは自己の何かについて誇り，卑下するのであって，自己のすべてを誇り，卑下するわけではない。すなわち，「われら自身の観念 (our idea of

ourself) が優れているかどうかに応じて，われわれは，こうした反対する情感のいずれかを感じ，誇って意気上り，卑下して気がめいるのである。[56]」

私は私（自己）という対象をある原因によって誇る。「われわれは，それゆえ，これらの情念の原因と対象，すなわち，情念を起こす観念と情念が起こったとき情念が注意を向ける観念とは区別せねばならない。[57]」情念を起こす観念とはわれら自身の観念の優劣性である。では，その基準は何か。それは徳や美であろう。Humeによると，徳や美は快を基底とした功用性であった。[58]もちろん，そこには，人が所有している物品，身体，能力などの優秀性も含まれるであろう。しかし，それらの優秀性の中でも自己ないし人格に近いものの優秀性ほど誇りや卑下の情念に関与するのである。「これらの性質が附着する主体（subjects）を考えてみて，私は新たな仮定（supposition）をつくる。これは，多くの明白な事例から確かと思われる仮定である。すなわち，これらの主体はわれわれ自身の部分かわれわれに近い関係にあるものかである。例えば，われわれの行為や態度の善い性質や悪い性質は徳と悪徳を構成し，われわれの人格上の性格を決定するが，これらほど誇りや卑下の情念に強力に働きかけるものはない。[59]」

われわれは自己のもつ優秀性において自己を誇る。本来，その優秀性を誇るべきであろうが，結局，それへの誇りは自己への誇りへと収斂する。優秀性は誇りという情念の原因にすぎなくなる。したがって，「誇りと卑下の対象はつねに自己なのである。[60]」

それでは，そういう情念の対象である自己とは何か。そして，自己を対象とする主体としての自己とは何か。すなわち，「私は私を誇る」とするときの，それぞれの私とは何であるか。さらに，誇りや卑下といった情念とは何であるか。

すでにHumeは，情念が知覚から構成されると述べた。しかし，それだけのことであって，情念がどのような意味をもつかについては探求されてはいない。「どれほど多くの言葉を用いても，こうした情念についての正しい定義を与えることはとてもできない。[61]」とHumeは語る。したがって，誇りという情念の対象である自己についてもそれがいえるであろう。Humeにとって，この自己は「結び合った知覚の継起」であって，あたかも共和国のような秩序を有していた。それを可能にするのは，個々の知覚を統合する力としての何かであろう。その力の一方には，おそらく，真善美のような統合力としての価値があるのであろう。しかし，他方には，価値へ向かって対象としての自己を統合するもうひとつの自己があるのではないか。「他のいかなる対象が心に包含されていようとも，これらの対象はわれわれ自身への視点をもって考慮されている。[62]」

自己が想像し，自己を誇るとき，いずれも自己が主体として存在し，自己の視点をもってあらゆる対象を見ている。その自己は何か。

Humeにおいては，想像力も情念も，対象としての自己も主体としての自己も，究極には説明し難い自然の本質のように思われている。すでに見たように，知覚の同一性を可能にする想像力という心の働き（act of mind）は，神秘的で説明できない何ものか（something mysterious and inexplicable）であった。神秘的で説明できないこととは，われわれの知が行く尽く果てであり，それゆえ，本質かつ根源的であるといえよう。

また，自己が自己を対象として誇るのも人間性の原理に関わるのであった。「第一に，誇りと卑下という情念が自己をその対象としてもつようにと決定されるのは，自然的のみか根源的特性（original property）によることは明白である。[63]」これは，「根源的性質あるいは原初的衝動（original quality or primary impulse）[64]」から生じるのであって，この性質あるいは衝動は，「精神（soul）から最も分離しがたく，他の性質に還元できないような性質である。[65]」したがって，これは知性を越えている。つまり，知性はこれ以上自己を説き明かすことはできない。

Humeの自己は，このような，根源的な何ごとかなのである。Humeは，これを確かなこととして信頼した。そして，ここから，人間性へ

の期待と習慣による自己の形成とが芽生えることになる。

結　語

Humeは，自己の本質をその同一性にあると見て，同一性がいかにして成立するかを探求した。その結果，Humeは，自己なるものをDescartesのコギトのように知的に疑いようもない存在であると見ることはできなかった。しかしHumeは，そのことによって，自己が存在せぬとか不確かなものであるとかいうのではない。むしろ，Humeにとっては，知的探求を超えているがゆえに，自己は，根源的で，宏大な大地に深く根を下ろしているのであった。知的には懐疑的であり，一面楽天的ともいえるHumeの自己省察は，このような，人間の原理へのゆるぎない信頼に立っていたのである。かくて，人と人とが結びつく共感もこの人間性への信頼から導き出されたといえる。

注

(1) M. Merleau-Ponty : Les relations avec autrui chez l'enfant, Les cours de Sorbonne, Centre de documentation universitaire, 1962.
滝浦静雄・木田元訳『眼と精神』
みすず書房．昭和41．pp．138－139.

(2) D. Hume : A Treatise of Human Nature, Reprinted from the Original Edition, in Three Volmes, Ed by L. A. Selby-Bigge, M. A, Oxford Clarendon Press, 1928. p. 251.

(3) D. Hume, ibid. p. 251.

(4) D. Hume, ibid. p. 252.

(5) D. Hume, ibid. p. 252.

(6) D. Hume, ibid. p. 634.

(7) D. Hume, ibid. p. 635.

(8) D. Hume, ibid. p. 252.

(9) D. Hume, ibid. p. 7.

(10) D. Hume, ibid. p. 1.

(11) D. Hume, ibid. p. 251

(12) D. Hume, ibid. p. 251.

(13) D. Hume, ibid. p. 253.

(14) D. Hume, ibid. p. 253.

(15) D. Hume, ibid. p. 255.

(16) D. Hume, ibid. p. 256.

(17) D. Hume, ibid. p. 258.

(18) D. Hume, ibid. p. 258.

(19) D. Hume, ibid. p. 258.

(20) D. Hume, ibid. p. 255.

(21) D. Hume, ibid. p. 255.

(22) D. Hume, ibid. p. 259.

(23) D. Hume, ibid. p. 259.

(24) D. Hume. ibid. pp. 259－260.

(25) D. Hume. ibid. p. 260.

(26) D. Hume, ibid. p. 257.

(27) D. Hume, ibid. p. 260.

(28) D. Hume, ibid. p. 260.

(29) D. Hume, ibid. p. 260.

(30) D. Hume, ibid. p. 260.

(31) D. Hume, ibid. p. 261.

(32) D. Hume, ibid. p. 261.

(33) D. Hume, ibid. p. 262.

(34) D. Hume, ibid. p. 633.

(35) D. Hume, ibid. p. 633.

(36) D. Hume, ibid. p. 634.

(37) D. Hume, ibid. p. 635.

(38) D. Hume, ibid. p. 635.

(39) D. Hume, ibid. p. 636.

(40) D. Hume, ibid. p. 635.

(41) D. Hume, ibid. p. 635.

(42) D. Hume, ibid. p. 636.

(43) D. Hume, ibid. p. 635.

(44) D. Hume, ibid. p. 261.

(45) D. Hume, ibid. p. 261.

(46) D. Hume, ibid. p. 261.

(47) D. Hume, ibid. p. 261.

(48) D. Hume, ibid. p. 253.

(49) D. Hume, ibid. p. 261.

(50) D. Hume, ibid. p. 275.

(51) D. Hume, ibid. p. 276.

(52) D. Hume, ibid. p. 277.

(53) D. Hume, ibid. p. 277.
(54) D. Hume, ibid p. 277.
(55) D. Hume, ibid p. 277 − 278.
(56) D. Hume, ibid. p. 277.
(57) D. Hume, ibid. p. 278.
(58) D. Hume, ibid. p. 285.
(59) D. Hume, ibid. p. 285.
(60) D. Hume, ibid. p. 280.
(61) D. Hume, ibid. p. 277.
(62) D. Hume, ibid. p. 277.
(63) D. Hume, ibid. p. 280.
(64) D. Hume, ibid. p. 280.
(65) D. Hume, ibid. p. 280.

付 記：この論文は，拙著「英国感情論の教育的考察(5)」（九州教育学会紀要第12巻）を踏まえ，それに新たな解釈を施し，論理を精密にしたものである。